

花粉症（季節性鼻アレルギー）

女性 四十九歳 パート（料理屋仲居）

主訴 鼻閉、くしゃみ、頸部のこり

現病歴 二十年以上前よりアレルギー性鼻炎（肥厚性鼻炎）。花粉症は十年以上前から。七年前と一昨年に鼻タケ（ポリープ）の手術。頸部のこりは十年以上になる。

所見 細緊数。胸鎖乳突筋及び僧帽筋硬化。行間（+）

治療 まず自律神経調整処置、アレルギー処置（内ネーブル四点、身柱等）、粘膜消炎処置（商丘、陰陵泉など）、帯脈、肝経気水穴処置、それと内ネーブル四点に皮内鍼固定。

経過 二回目（三日目） あれから鼻閉はなく、くしゃみとまる。頸も大分よい。
三回目（六日目） 調子はずっとよい。胸鎖乳突筋緊張柔らかく、細緊数ゆるんでくる。

考察 当患者はまさに著効だった。花粉症に限らず、一般的にアレルギー性鼻炎は数々のアレルギーなどの刺激によって鼻の中の粘膜が腫れて、空気の通り道が狭くなり、それで鼻づまりや鼻汁、くしゃみがでたりする。

アレルギー体質は異種タンパクのとりすぎでおこるといわれています。昭和二十四年頃から粉ミルクが流行し始めました。消化力の未熟な時期から牛の乳などの異種タンパクにさらされ続けてきたわけです。

この患者は昭和二十三年生まれですから、異種タンパクを身近にとれる環境で育ってきたはずですが。

アレルギー性鼻炎になる人は自律神経が非常に不安定（過敏）であるといわれています。彼女も例外ではなく、脈状は細緊数、つまり自律神経失調症を呈しており、これに対する処置（長野治療システムの神経、内分泌系になります）が著効の一つになったと考えられます。それと鼻炎や花粉症の実態は粘膜の腫れですから、粘膜消炎処置及びアレルギー処置（両方とも免疫系）がその通り効いてくれたわけです。

この三回の治療だけで、肥厚性鼻炎といわれる慢性的な粘膜の腫れによる鼻道の狭窄が広がったために、鼻閉その他の症状が激減したものと思われます。